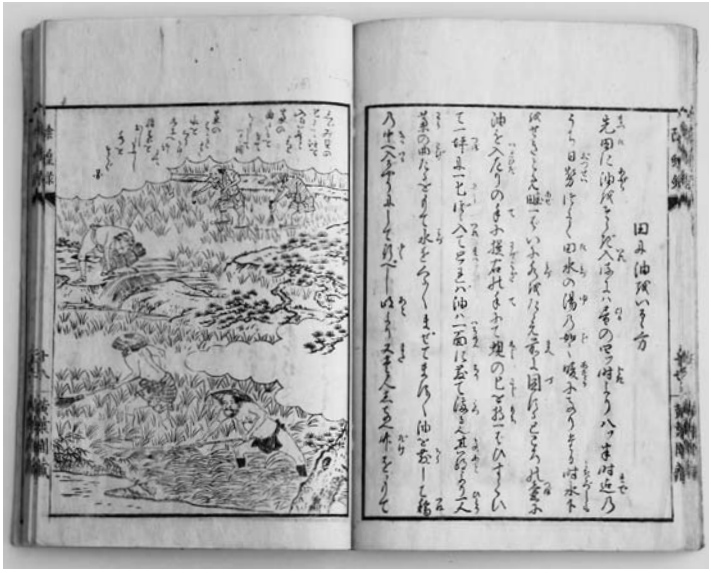
岩瀬文庫コレクション

除蝗録（34―63）1冊

日本の農業は稲作を中心にしたものとなっています。それは大陸から稲作が伝わった弥生時代から現在に至るまで続いています。江戸時代は年貢を米で納めるほどでした。しかし、稲作は自然を相手にしていますので、気候に大きく影響され、不作の年が続き飢饉が起こることもたびたびでした。

本書を著した大蔵永常は九州出身の農学者です。この除蝗録では、すでに九州では有益とされていた油を用いた稲の害虫駆除法を、より多くの人々、とりわけそれまで何度も飢饉で苦しんだ東北地方の人に伝えようと、文政9（1826）年に著されたものです。

さて、この害虫駆除方法とは、水田に油を浮かべ、その水面へ稲の害虫を払い落として油の皮膜で虫が飛び去ることを防ぐとともに虫の気門をふさいで窒息死させるという方法で、そのときに用いる油には鯨の油が最適であるということも記されています。



▶油を用いた害虫駆除作業の風景の挿し絵です。挿し絵は、『江戸名所図会』の挿し絵でも知られる長谷川雪旦が描いています。この資料は、開催中の企画展「日本人とくじら」にて展示中です。

シリーズ66 西尾の古を探る

京の大火と松平乗完

大給松平12代・松平乗完が京都所司代に任ぜられた直後の天明8（1788）年正月30日早朝、京都で大火事（天明大火）がありました。四条大橋東詰め辺りで出火し、折あしく東南方向からの強風に煽られた火の粉は鴨川の上を走り抜けて寺町通りの寺院に燃え移り、たちまちのうちに京都市街は焦土と化しました。その被害は少なくとも焼失地域1424ヘクタール、焼失家屋3万6797軒、焼失寺院201、焼失神社37に及び、京都所司代の屋敷も焼失しました。

この事件を聞いた乗完は直ちに上洛して、東山高臺寺に寓居し、京都町奉行と共に災害後の復興に努め、都の民たちの心に安心を与え、離散せずに居を営むことのできるようにしました。乗完から町奉行へ達した文書には、この度の火災で全ての人が難義となってしまった。今より互いに奢りを棄て、生活を質素にして親しみ睦みあい、それぞれの産業に励むべきであると書かれています。

その後、乗完と京都町奉行からの指示により、京都御所の東側にある浄土宗の大本山の清浄華院（浄華院）で鎮魂の大施餓鬼法要が行われました。その時、同寺の聖道大和尚は本堂前に供養塔である五輪塔と鎮魂碑である方形の石碑を建立しました。五輪塔の地輪には「焼亡横死百五十人之墓」と刻まれています。

災害を完璧に防ぐことは不可能なことですが、それでも災害に対する備えを欠かすわけにはいきません。先人たちは、この歴史を忘れさせないようにと供養塔と鎮魂碑を建て、未来へのメッセージを残したのでしょう。